様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：２２７０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ２０７９３

研究課題名（和文）産褥早期の女性に対する会陰部温罨法の効果

研究課題名（英文）Effect of warm perineal compresses in early postpartum women

研究代表者
竹内　翔子（Takeuchi, Shoko）

横浜市立大学・医学部・講師

研究者番号：００７５８２６１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、産褥早期の女性に対する会陰部温罨法による体温への影響と疼痛緩和効果を検証することである。プログラム開発にあたり、温罨法に関する文献検討や温罨法を実践している台湾の産後ケアセンターにてケアの現状調査、全国の産科医療施設を対象とした身体回復ケアに関する質問紙調査を行った。文献検討や台湾での調査では、損傷治癒過程に基づく介入時期の検討や生理学的指標による効果検証、疼痛だけでなく他の身体症状への効果検証の必要性などが示唆された。さらに全国調査では施設形態によらず実践可能なプログラムの開発に向け、現状と課題が明確となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまで出産後の会陰部痛を含む身体回復を目的とした看護ケアの実態については明らかにされておらず、全国の産科医療施設のケアの状況を施設別で比較することにより、我が国における現状と課題を明確化することができた。本研究成果を基盤とし、温罨法プログラムの開発につなげていくことで、出産後女性の身体回復の促進に寄与することができるものと考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to verify the effect of warm perineal compresses on the elevation of body temperature and the reduction of perineal pain in women in the early postpartum period . We reviewed the literature concerning warm compresses during early postpartum and visited some postpartum care centers in Taiwan that practiced warm compresses on postpartum women . The results suggested that it needed to consider intervention time based on the wound-healing process, to measure biological indexes as evaluation outcome, or verify the effect of not only perineal pain but also other physical symptoms. Moreover, the quantitative descriptive study was conducted to examine the current state of perineal care in Japan. In this study, the current status and issues of perineal care in Japan were identified to develop a warm perineal compression program that can be performed regardless of facility forms.

研究分野：助産学

キーワード：産褥期　看護ケア　会陰部　温罨法

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本邦における平成 26 年度の合計特殊出生率は 1.42 であり、出産は一人の女性にとって貴重な体験であり、家族の誕生という喜び体験でもある。その一方、経腟分娩の場合には会陰切開や会陰裂傷などの会陰部が損傷する危険性を伴う。特に初産婦は経産婦と比較して会陰組織の伸展が不良であることから、会陰部の損傷が生じやすい。また日本の会陰切開率は初産婦で 30～100%、経産婦で 10～70%であることが報告されており（河合，2000）、他の先進国である米国 27～38%、カナダ 3～31%、オーストラリア 9.9～20.9%（Graham et al., 2005）と比較すると割合が高く、日本は世界の中でも比較的会陰切開の多い国であると考えられる。またアジア人は西洋人と比べて会陰裂傷Ⅲ度やⅣ度などの重度の会陰損傷が生じやすいことも報告されている（Dahlen et al., 2007）。研究者は首都圏の病院および助産所 9 施設で出産した 425 名の女性を対象に、産褥早期の会陰部痛への影響因子と日常生活への支障を明らかにした。その結果、「35 歳以上」「初産婦」「仰臥位分娩」「会陰切開」が産褥早期の会陰部痛への助長因子であり、その痛みによって座位や排泄、動静などの動作に関わる支障だけでなく、行動意欲の減退などの心理的側面にも影響しており、出産後のケア全体の満足度に比べ、会陰ケアに対する満足度が低かったことから（竹内＆柳井，2013）、会陰部痛を緩和するケアの確立が求められる。

会陰部痛を緩和するケアに関して、東洋では古来より身体を温めることが産後の養生によいことであるとされ、パラオでは女性の会陰部を薬草の入った湯で温めたり、韓国では座浴が実施されている（松岡他，2011）。一方欧米諸国の研究では、冷罨法に関する研究が多く、エビデンスとして蓄積されているが、温罨法に関する研究は極めて少ない。

２．研究の目的

本研究の目的は、産褥早期の女性に対する会陰部温罨法の体温への影響と疼痛緩和効果の検証を行うことである。

３．研究の方法

1） 産褥期の温罨法に関する文献検討

国内外の産褥期の温罨法に関する介入研究の内容を明らかにすることを目的に、文献検討を実施した。検索データベースは CINAHL、PubMed、医学中央雑誌 Web を用い、「産褥期」「温罨法」に関するキーワードを使用した。

2）台湾における産後ケアセンターでの現状調査

産後早期の女性を対象に温罨法を実践している台湾の産後ケアセンターを訪問し、看護職を対象にインタビュー調査を行った。調査内容は会陰部温罨法の具体的方法や効果、温罨法を実践することに対する認識等である。

3）日本における出産後早期の会陰ケアに関する横断調査

研究デザインは量的横断的記述的研究である。対象は全国の分娩を取り扱う産科医療施設で働く看護職であり、2020 年 1～3 月に 3200 施設に配布し郵送法にて回収した。データ収集内容は会陰ケアの重要性の認識や会陰ケア内容の実践状況などである。

４．研究成果

1）産褥期の温罨法に関する文献検討

産褥期の温罨法に関する先行研究では、頸部から背部への温罨法に関する研究が多く、方法として温熱シートやホットパックなど様々な方法がとられていた。会陰部温罨法の効果に関する先行研究では、出産後 24 時間以内の介入を実施した結果、冷罨法を実施した場合と比較して会陰縫合部の浮腫が増加したことが報告されていた。さらに評価指標については温罨法を実施した部位の疼痛緩和効果や気分・不安などの精神的症状などの主観的指標が用いられてた。しかし産褥期以外の時期での温罨法の効果に関する研究では、生理学的指標を用いられていることから、産褥期の温罨法に関しても生理学的指標を用いて評価する必要性が示唆された。

2） 台湾における産後ケアセンターでの現状調査

産後ケアセンター3 施設を対象に調査を行った結果、すべての施設で身体を温めるケアを実践していたが、会陰部の温罨法を実践している施設は 1 施設のみであった。具体的方法については、座浴を実施しており、1 日 2～3 回、湯を入れたタライに 10 分間浸かるというものであった。看護職は 24 時間以降の温罨法が効果的であると認識しており、座浴には会陰損傷部位の腫脹を軽減させるだけでなく、リラックス効果があると認識していた。

3）日本における出産後早期の会陰ケアに関する横断調査

質問紙の回収は 869 部（回収率 27.2%）であり、欠損値の多い 2 部を除き、有効回答の得られた 867 部を分析対象とした。

対象の属性について、職種は助産師が 95.2%（825 名）と最も多く、産科での臨床経験年数は平均 19.3 年（SD ＝ 9.99）であった。施設形態については、病院が 44.5%（384 名）、診療所が 41.3%（358 名）、助産所が 14.0%（121 名）、無回答が 4 名（0.5%）であり、96.3%（835 名）が母児同室を実施していた。母児同室の実施時間については、77.3%（646 名）が 24 時間であった。会陰ケアの重要性については、施設形態によらず、9 割以上が「とても重要である」「少し重要である」と回答した。

会陰部へのケアの実施状況について、「いつも実施している」「時々実施している」の割合が多かったケア項目では、病院・診療所は鎮痛剤の使用と円座の使用であり、鎮痛剤の使用は病院 98.7%（379 名）、診療所 95.3%（341 名）、円座の使用は病院 97.9%（376 名）、診療所 98.0%（351 名だった。一方助産所では円座の使用が最も多く 58.3%（70 名）であり、次いでオイルの使用 32.7%（39 名）、湯洗浄 26.7%（32 名）であった（表 1）。さらに助産所では会陰部へのケアとして温熱療法や温灸、アロマオイル・スプレーの使用、ホメオパシー療法など多岐にわたっていた。

本研究の結果から、会陰部に対するケアとして、病院・診療所では類似したケアの実施状況であり、鎮痛剤や円座の使用が主であること、助産所では病院や診療所と比べ、様々な方法が実践されていることが明らかとなった。また助産所は様々な方法が実践されているものの実施割合としては 10～30%であり、妊娠・分娩期から会陰損傷が生じない関わりをしていると推察された。さらに温罨法については病院・診療所ではほとんど実践されておらず、助産所のほうが実践されていた。今後は助産所での実践内容を明らかにし、施設形態によらず実践可能な温罨法プログラム開発につなげていく必要性が示唆された。

表1　施設別による会陰ケアの実施割合

	病院		診療所		助産所	
	n	%	n	%	n	%
鎮痛剤	379	(98.7)	341	(95.3)	20	(16.7)
円座の使用	376	(97.9)	351	(98.0)	70	(58.3)
冷罨法	83	(21.6)	102	(28.5)	13	(10.8)
温罨法	14	(3.7)	6	(1.7)	20	(16.7)
湯洗浄	55	(14.3)	48	(13.4)	32	(26.7)
オイルの使用	4	(1.0)	11	(3.1)	39	(32.7)
軟膏の使用	46	(12.0)	62	(17.3)	30	(25.0)
抜糸	190	(49.5)	163	(45.5)	14	(11.7)
鍼灸	1	(0.3)	3	(0.8)	10	(8.3)

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Takeuchi Shoko、Horiuchi Shigeko	４．巻 17
２．論文標題 Feasibility of a Smartphone website to support antenatal Perineal massage in pregnant women	５．発行年 2017年
３．雑誌名 BMC Pregnancy and Childbirth	６．最初と最後の頁 354
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1186/s12884-017-1536-9	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 竹内翔子、堀内成子
２．発表標題 妊娠中に会陰マッサージを実施した初産婦の思いと体験
３．学会等名 第38回日本看護科学学会学術集会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考